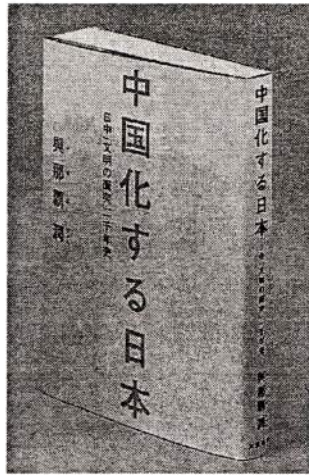


「西洋化」の常識を覆す

著 與那覇潤 (よなは・じゅん)

中国化する日本



(文芸春秋・1575円)

世間は空前の実学志向である。誰もがすぐに役立つ知識を求めている。法律やビジネスといった実用的学問の陰で、歴史学や政治学が「死児の齢を数えるが如く」忘れられない程度に存在している。これが現在の高等教育の姿である。愛知県立大学で教鞭をとる著者にも、この光景は意識されているであろう。本書は「役に立つ歴史の本」ではない。寧ろその軽妙洒落な文体と単純明快な論理を通して、私たちの期待を良い意味で「裏切ってくれる」本である。

私たちの国は明治維新で「近代化」し、敗戦で「民主化」したことになっている(そして「西洋」と「日本」という構図が私たちの思考を支配している)。しかし本書はこうした歴史の「常識」には与しない。「中国化」と「江戸時代化」というユニークな視点から、日本社会は基本的に変わっていないと論じている。「中国化」とは普遍的理念に拠る政治の道德化、科挙に代表される行政の一元化と資本・人員の流動性の高い社会を意味し、逆に「江戸時代化」とは利害調整としての政治、家や会社といった個々の「コミュニティ」を重視した流動性の低い農村型社会を示している。著者は、日本社会は未だ「江戸時代」の中にあるが、「中国化」こそが歴史の必然「グローバル化」とは「中国化」した世界の姿であると主張する。しかし、現実離れた普遍主義が暴走する危険は常にある(それはアメリカが実証済みである)。本書は日本の「中国的」な要素―実効性は低いが普遍的な憲法九条―を「ジャパニズム」の核として、中国化の行き過ぎを緩和する指針ともしている。

著者の主張には賛否が分かれるだろう。しかし、本書は大学講壇の正しい在り方を示唆しているのかもしれない。本書は私たちの「常識」が「裸の王様」であることを自問自答させてくれる―それが高等教育の本来の目的である。大学は「正解」ではなく、「正解の探し方」を教える場所であればならない。そこでこそ大学は普遍性(Universe)の名に値するのではないだろうか。

(九州大准教授 大賀哲)